

藤田隆三郎

身分詐称で渡航・
トランプの元祖となる出身地 愛媛県宇和島市
生 年 一八五六（安政三）年五月二日
没 年 一九三〇（昭和五）年十二月二十七日

藤田隆三郎は宇和島藩伊達家に代々仕える中堅武士の家に生まれた。早くに母をコレラで亡くし、父と兄は藩の仕事のため宇和島を離れており、姉と二人暮らしだったが、父敏興の意向により、藩がシーボルト門下の三瀬周三を招いて設けた英蘭学稽古場で、英語を教わった。藩の学校とはいえ「異人」の言葉を習う少年はごく少数、二〇人ほどでそれも次第に減っていった。そのため、同じ年頃の子供たちには奇異に見え、石を投げられたりずいぶんといじめられ、英語を習うのを止めたいと姉に訴えたこともあったという。

一八六九（明治二）年、父に連れられ大阪に出た。本格的に英語を習うためであった。どういう経緯があったのかわからないが、藤田は英国領事館の通訳官であったアストンに英語を習うことになった。それまで教わっていた英語の発音がひどかったため苦労したという。しばらくしてアストンが東京へ転勤すると彼も一緒に上京

し、学習を継続した。この頃のことを藤田は、宇和島藩から貢進生として大学南校に入学する準備の英語学習というところで、月々学資が給与されていたのちに回想している。しかし公的記録にそのことは見えず、真偽のほどは分らない。当時十五歳だった藤田は十六歳以上という貢進生の年齢条件を満たしておらず、実際には一歳年長の穂積陳重が藩の貢進生として選ばれている。

この七〇年七月の貢進生差出の指令時期と前後して藤田には転機が訪れていた。アストンが休暇で故国へ帰ることが決まったのである。彼はこの事態を前に「突遽青雲の雄図勃然として起り渡英の念禁ずる能わず」アストンに英語の学習を続けたいことを訴え、イギリスへ連れて行ってくれるよう頼み込んだ。これに対して旅費さえ工面すれば住むところも学校も世話をしようというたいへん好意的な返事だったので、喜んで東京の藩庁に行つて相談したところ、在京の家老も大いに賛成してくれた

という。ただ渡航許可を得るには、武士身分であると藩が詳細に調査して外務省へ伺い出て許可を得る必要があった。それでは間に合わないので、家老と相談の上、藩庁の許可だけで外務省かその出先の役所に届けられればすぐに許可証が発行される武士以外の身分ということ、藤田は「宇和島城下商人」と身分を偽って渡航許可証を手にしたのだった。時に同年閏十月十一日、藤田は青雲の大志を抱き、横浜港を「波濤千里」の彼方、イギリスへと旅立ったのである。渡航許可申請からわずか三日後のことであった。

藤田は渡英後、実際にはアストンの故郷アイルランドのベルファーストで学校に通って二年ほど教育を受けたのち、ロンドンに渡った。しかしその頃には自己資金と



藤田隆三郎

藩から渡された学資は底を尽き、故国からの送金も途切れていた。このため、留学が継続できるよう官費留學生に身分切り替

えを願い出たものの「商人」として渡航したのが徒となつて果たせず、万事窮すの状態に陥ってしまった。幸い岩倉具視を代表とする使節団とともにイギリスの鉄道を調査していた小室信夫の下で関係法規の調査にあたる仕事を得ることができたが、持ち前の短気が災いして失職してしまい、尾羽打ち枯らして七四年正月、帰国した。その時の懐中に残っていたのは僅か二円と古びたカード一組だけだったという。

帰国後、すぐに開成学校に入学することになるが、その際の編入試験では英文の論文試験は文句なしの上々だったが、数学の成績が「不良」で、そのため一年級に入学させられたという。後日、これが二年級であれば菊池武夫、鳩山和夫、また岡村輝彦、穂積陳重らとともに再び米欧に留学でき、大学卒業後は司法官として田舎廻りもせずに済んだものをと悔しがる藤田だったが、開成学校在學生中、数学嫌いの三傑に入られているのも頷ける逸話である。彼が帰国時に持って帰ってきたカードは開成学校で流行し、その後日本中で「トランプ」として普及することになる。藤田はその元祖であった。